

埋葬施設と太陽 一朝日遺跡を中心に

東海大学大学院文学研究科博士課程前期2年 白川美冬

1. 赤塚次郎氏による問題提起の重要性

① 周辺景観から考える

今回、私が尾張地域と太陽の関係を点検したのは、赤塚次郎さんの問題提起がきっかけです。赤塚さんは、遺跡の立地や方位に注目し、尾張地域の人々が太陽の運行に特別な意味を与えながら生活を営んだことを提唱されました。朝日遺跡は、夏至の太陽が伊吹山へ沈み、冬至の太陽が雨乞岳へ沈む場所に営まれ、東之宮古墳や北山古墳の軸線は冬至の日の出に向けられたと言います(赤塚2018、2022)。遺跡と周辺景観の関係から無文字社会の認知領域に迫ることは、先端的な視点であり非常に重要だと思います。

② 冬至の意味

そもそも太陽は、日々、出没場所を変えながら、夏至と冬至の間を定期的に移動する天体です。夏至や冬至の前後5日間だけ、ほぼ同じ場所から出没する特性を持っています(図1)。そのため、夏至や冬至は人間が認識しやすく、昼と夜の長さが最もアンバランスになることから、世界各地で祭りが執り行われてきました。日本では、冬至に太陽の復活・再生を祈る祭祀が知られています。新嘗祭や大嘗祭もそのひとつです。太陰太陽暦からグレゴリオ暦へ改暦した影響で、現在は11月に執り行われていますが、本来は冬至の付近に行われた祭祀だとも言われます。また、最近では、赤塚さんが指摘された2基以外にも、冬至の日の出に軸線を沿わせた事例が発見されています(北條2017、白川2022)。こうした事実をふまえると、太陽と人々の営みを考えることは、古代人の認知領域に迫る点で、とても重要だと考えられるのです。

③ 太陽と戦後の日本考古学

しかし日本の考古学では、太陽と人々の関係を考えることが避けられてきました。これには第二次世界大戦が関係したようです。戦前の歴史学は、古事記や日本書紀を事実とする姿勢で研究が進められ、考古学は記紀神話が事実であることを証明する補助的な役割を担ったとされています。たとえば皇国史観を推し進めた後藤守一は、鶏形埴輪を「天岩戸に於いて鳴いた常世の長鳴鳥の意義のものであったかも知れない」(後藤1931,45-46頁)と考えていました。

やがて日本が敗戦を迎えると、皇国史観からの脱却が叫ばれるようになり、考古学は科学的な視点を重視する方向へ歩み始めます。その過程で、国家主義思想の源流である太陽神を歴史の中に組み込むこと自体がタブー視されたと言われます。こうした情勢下であったために、福岡県平原1号墓の被葬者を太陽神アマテラスのモデルだと論じた原田大六の著書(原田1966)は、禁書扱いにな



図1 太陽の運行と冬至の意味

つたらしく、太陽と戦後日本の考古学は疎遠になっていったのです。

とはいえ皇国史観を支えた太陽神との決別が、科学的な歴史学の構築に繋がるか否かは別の問題です。戦前歴史学の過ちを深く反省しつつも、記紀神話を科学的・客観的に判断することで、民衆によって形成された日本古来の伝統を再構築すべきだと私は考えています。考古学は赤塚さんによる問題提起を重く受け止めるべきなのです。そこで今回は、朝日遺跡に眠る痕跡から、尾張地域を生きた人々と太陽の関係を考えてみたいと思います。

2.朝日遺跡の埋葬施設と太陽

① 朝日遺跡の概要と周辺景観

朝日遺跡は、弥生時代に営まれた全国有数の大規模環濠集落です。その規模は、東西約1.4km、南北約0.8kmに及んでいます。生産・交易の中核拠点として東西の文化が交錯した朝日遺跡では、独自の文化が形成され、他地域にも影響を与えてきました(原田2013)。発掘調査では、縄文時代後期・弥生時代前期～終末期・古墳時代前期・古墳時代中期の遺構が検出されており、長期間・継続的に利用されていたことが分かっています。今回は、560基以上の方形周溝墓が検出された弥生時代を対象に、土壙墓や人骨の方位を周辺景観と照らし合わせながら、古代人が太陽の運行にどのような意味を与えたのかを通時的に考えていきたいと思っています(図2)。

朝日遺跡は、遠賀川系土器を保持した近畿や伊勢地域からの入植者によって開拓された遺跡です。彼らが入植した当時、縄文の伝統(条痕文系土器)を保持する集団や、他系統の土器(削痕系深鉢・沈線文系土器)を用いる集団が付近で生活を営んでおり、多様な習俗と接する環境のもとで人々は生活を始めました。

かつて、朝日遺跡の周囲には広大な湿原が広がっていました。周囲を見渡すと、北東には御嶽山、東には猿投山、南西には雨乞岳、北西には伊吹山が遠望できます。この景観に、弥生時代中期前葉(B.C.250)の太陽の運行を再現してみると、夏至の太陽が伊吹山の頂上付近へ沈み、冬至の太陽は雨乞岳が連なる山脈の峠付近に沈んでいくことがわかります(図3)。

② 弥生時代中期前葉

大規模な集落景観が形成された中期前葉、朝日遺跡では人々が生活を営む北区画と南区画の東西に墓域が営まれます。東墓域には大型の方形周溝墓が、西には比較的小型で等質的な方形周溝墓が造営されました。集落の長が眠る墓所が太陽の昇る方向に設置され

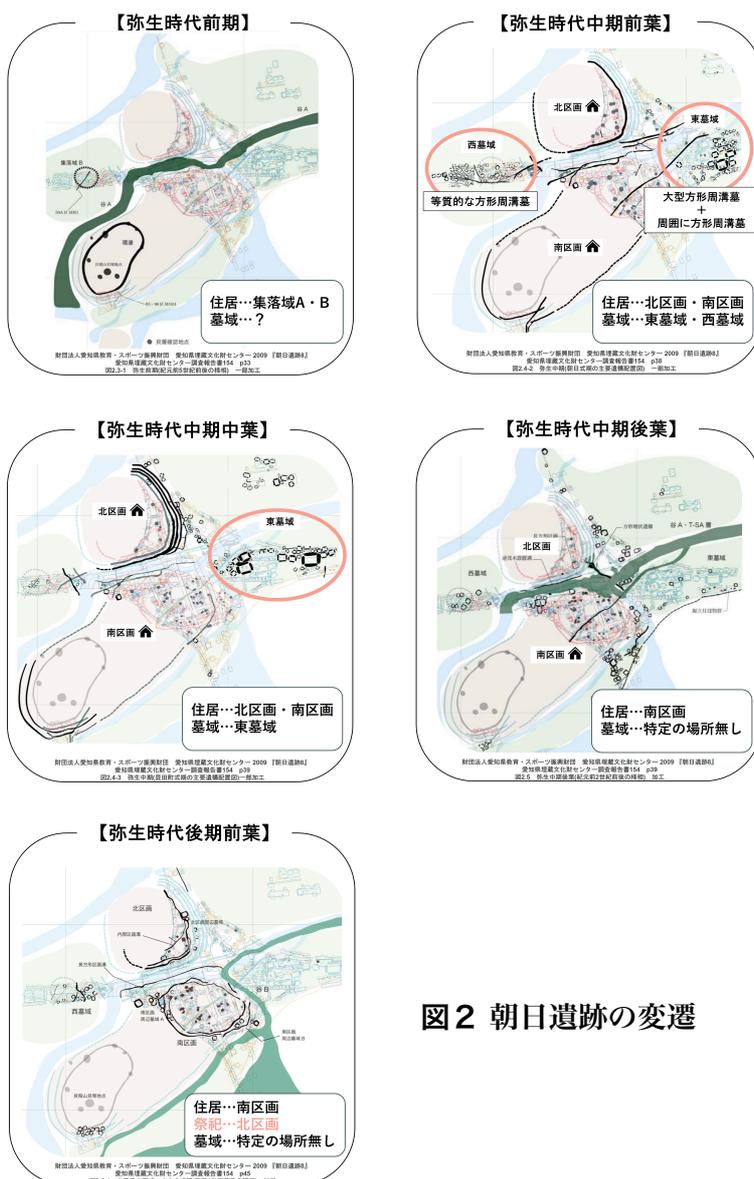


図2 朝日遺跡の変遷

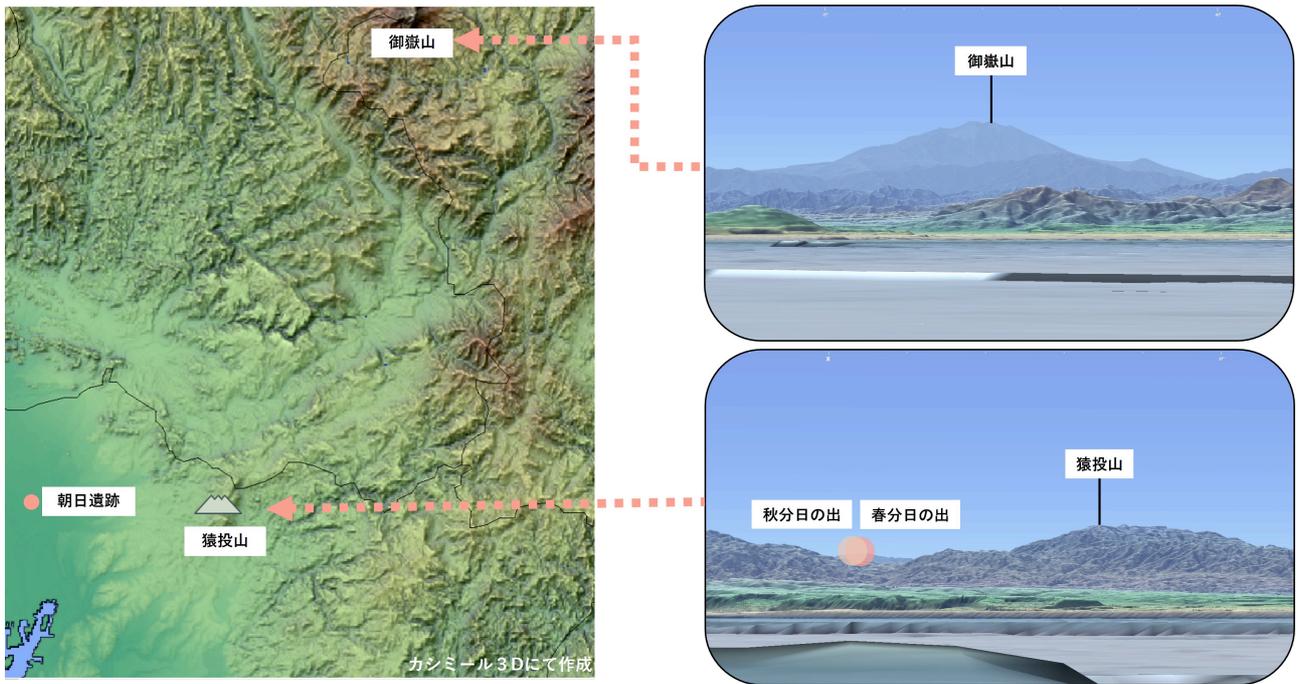


図3a 朝日遺跡の周辺景観
(BC.250-東側)

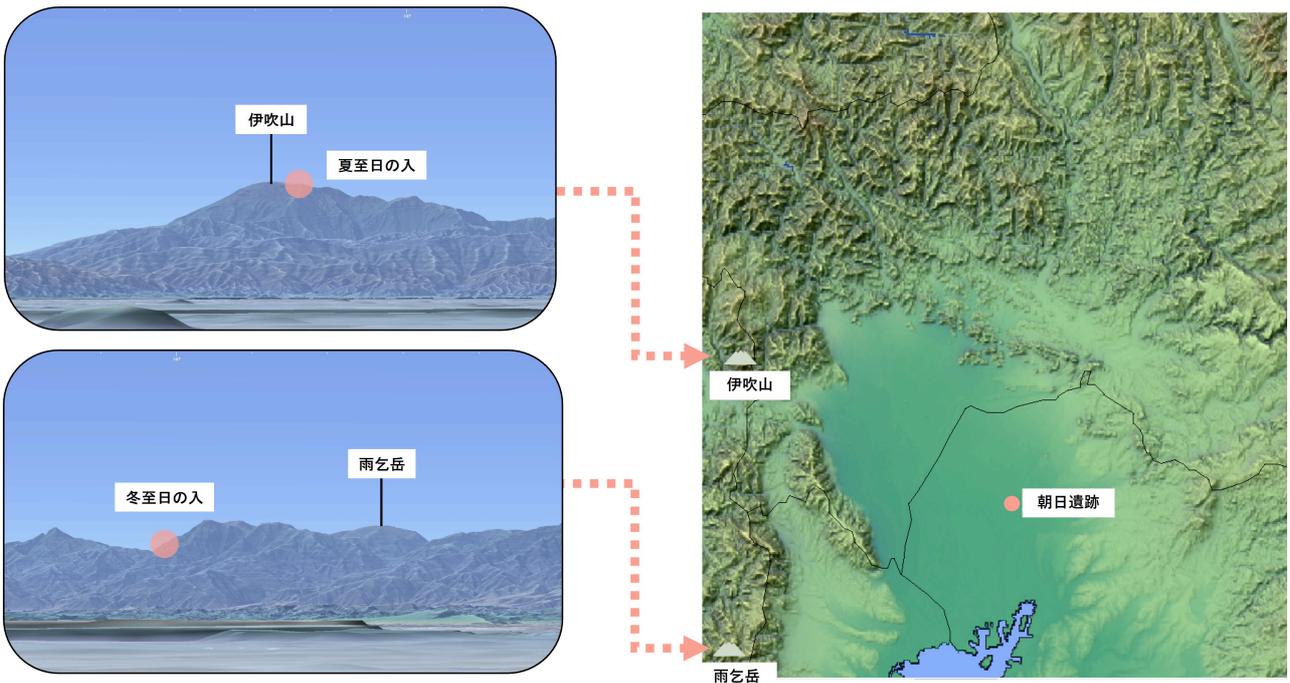


図3b 朝日遺跡の周辺景観
(BC.250-西側)

たという事実から、赤塚さんは太陽との関係を示唆しています(愛知県埋蔵文化財センター2009)。

中期前葉には西墓域から複数の土壙墓が検出されています。周辺景観と照らし合わせたものが図4です。一つの事例を除いて、春分・秋分の出没方向を向くことが確認されました。墓壙の方向が猿投山よりやや北を向くことを踏まえると、太陽との関わりで捉えることができそうです。

私が朝日遺跡と太陽の関係を考えるのには理由があります。それが鶏の存在です。鶏は稲作と共に伝わった外来動物で、弥生時代には7遺跡(愛知県朝日遺跡、大阪府宮ノ下遺跡、奈良県唐古・

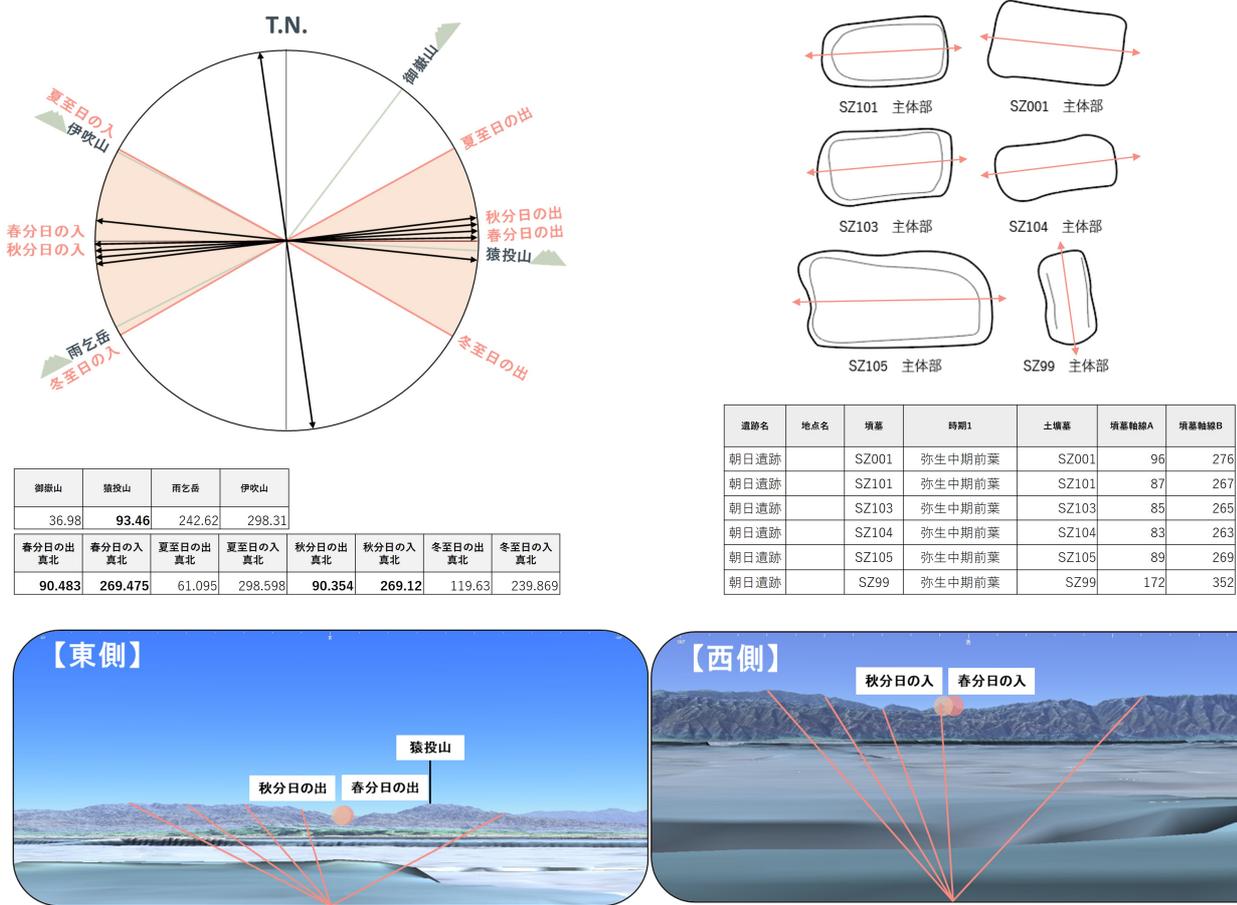


図4 朝日遺跡の土壌墓方位 (BC.250)

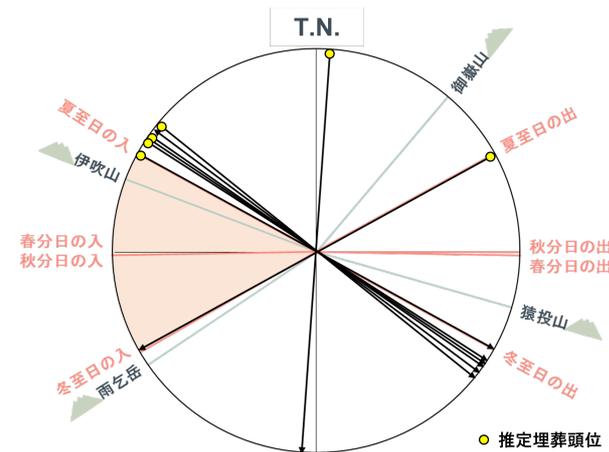
鍵遺跡、福岡県塚崎東畑遺跡、福岡県酒見貝塚、長崎県唐神貝塚、長崎県原の辻遺跡)でしか確認されていません(西本1993・1994、江田・井上2011)。弥生時代に確認された鶏の性別は、ほとんどが雄ですが、体が小さく闘鶏に有利な個体が選抜されたわけではないことが指摘されています(江田2016・2018)。そのため、食料や骨角製品の材料ではなく、朝を知らせる「時告げ鳥」として祭祀に用いられたとする説が有力です(新美2008)。

また、古墳時代には、鶏形埴輪が墓の上に置かれるようになります。一般的には、記紀神話に登場する天の岩戸説話と関連づけた解釈がなされており、死者の魂を再生させる役割を担ったと理解されています(沼田1897ほか)。他の解釈としては、霊界(夜)と俗界(昼)を遮断し、時間を支配する役割を担ったと考える説(坂本1999)、被葬者の魂の安寧を守る黄泉国の霊鳥とする説(澤田2000)などがあります。いずれにしても太陽や死生観と深い関係にある鶏が朝日遺跡で飼育されていたという事実は、決して無視できるものではありません。埋葬施設の軸線が太陽の出没範囲に向けられた事実は、鶏の存在と併せて考察すべきで、偶然の産物だと一蹴してはいけません。

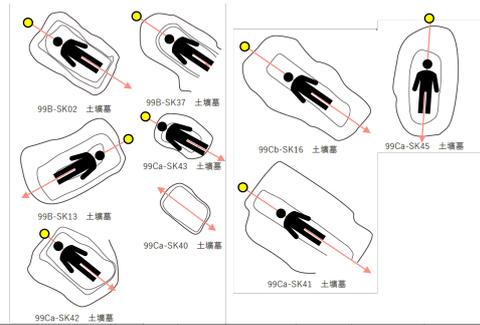
③ 弥生中期中葉

中期中葉になると、朝日遺跡では西墓域が廃れ、集落の東側に墓域が展開していきました。報告書では、東西方向を向く方形周溝墓が多いことがわかります。しかし、中期中葉の朝日遺跡からは、土壌墓や人骨が検出されていません。そこで、この時期の動向を探るために、ここでは同時期に営まれた猫島遺跡を取り上げたいと思います。

猫島遺跡は朝日遺跡から北へ約6.5kmの場所に位置しています。複数の土壌墓が確認されており、土壌墓の軸線を見てみると、太陽の出没範囲を意識した可能性が考えられます(図5)。このような点検結果に、報告書で推測されている埋葬頭位を当てはめると、頭を夏至の日の入り方向に向け、脚を冬至の日の出方向に向けたと推測されます(赤塚2003)。



御蔵山	猿投山	雨乞岳	伊吹山
36.91	106.29	236.04	290.68
春分日の出 真北	春分日の入 真北	夏至日の出 真北	夏至日の入 真北
90.725	269.105	61.100	298.900
秋分日の入 真北	秋分日の出 真北	冬至日の出 真北	冬至日の入 真北
90.376	268.969	119.478	239.701



遺跡名	地点名	墳墓	時期1	土壌墓	墳墓軸線A	墳墓軸線B
猫島遺跡	99B	SK02	弥生中期中葉	SK02	123	303
猫島遺跡	99B	SK13	弥生中期中葉	SK13	61	241
猫島遺跡	99Cb	SK16	弥生中期中葉	SK16	125	305
猫島遺跡	99B	SK37	弥生中期中葉	SK37	124	304
猫島遺跡	99Ca	SK40	弥生中期中葉	SK40	127	307
猫島遺跡	99Ca	SK41	弥生中期中葉	SK41	124	304
猫島遺跡	99Ca	SK42	弥生中期中葉	SK42	129	309
猫島遺跡	99Ca	SK43	弥生中期中葉	SK43	119	299
猫島遺跡	99Ca	SK45	弥生中期中葉	SK45	4	184

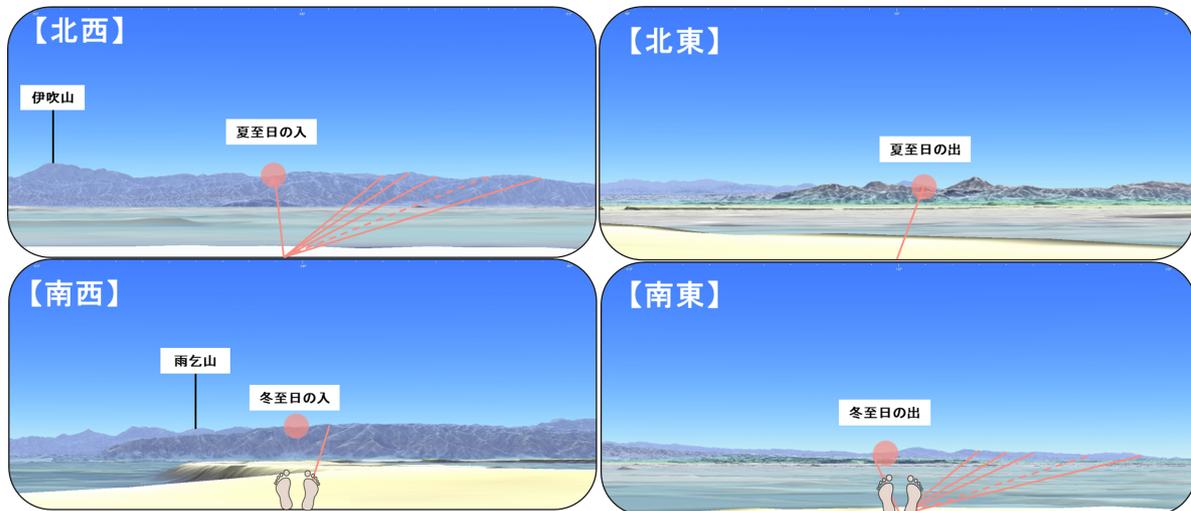


図5 猫島遺跡の土壙墓方位 (B.C.150)

また猫島遺跡からは、ルリハムシ等の畑作に伴う害虫や、炭化した米が発見されています。稲作農耕を行う人々にとって、その生育に欠かせない太陽は身近な存在です。そのため、太陽への信仰が埋葬施設にも反映されたと考えることができます。

④ 弥生中期後葉

さて、中期後葉になると朝日遺跡に急激な変化が訪れます。明確な区画や環濠が消滅し、墓域が東西に限定されることなく形成されたのです。また先祖代々続く墓の上に新たな墓が築かれ、墳丘軸線に明確な傾向が検出しづらくなるのもこの時期の特徴です。尾張地域では凹線文系土器の流入と連動するかたちで、従来の伝統や習俗を破壊するかのよう現象が認められるのです。

この時期に出土した人骨の埋葬頭位を点検したものが図6です。中期前葉の春分・秋分軸線と中期中葉の夏至・冬至軸線を活かしつつ、南北軸線も採用されました。埋葬頭位も西から東方向に変化していることが分かります。大多数が太陽という古相の方位観念を採用しながらも、南北軸線という新相の方位観念が導入され、埋葬頭位に多様性が認められたのは、一体なぜなのでしょう。方位観念が変容した要因を、人骨の特徴と出土遺物から考えてみたいと思います。

近年行われた出土人骨の分析では、朝日遺跡の人骨が高身長で、北九州や山口県周辺の弥生人骨と類似すること (池田1992)、縄文人にはないDNAを保持したことが明らかとなりました(篠田ほか2021)。つまり、渡来系弥生人がこの遺跡で生活していたことも確実で、彼らを通じて外来系

の文化が積極的に取り入れられたと考えられるのです。

この時期を代表する土器の一つが、楕円形の孔をあけた円窓付土器です。中期中葉から中期後葉まで製作され、中期後葉に最盛期を迎えました。口縁部に畿内の様式として知られる凹線紋系土器の文様を採用したり、体部下半の屈折という在来器種と共通する技法を使用したりする、流動性を兼ね備えた土器です(伊藤2002)。発掘調査の結果、墓域や墓域の端から出土すること、先祖が眠る東西の墓域から出土しないことがわかっています。つまり、この時期の円窓付土器は、葬送儀礼の変容を示唆する資料となりうるのです。

また、この時期の朝日遺跡からは鳥形土器が出土し始めます。鳥を模した諸製品が生産され始めるのは、弥生時代の特徴のひとつです。大陸から稲作農耕が伝わり、鳥を神聖視する鳥霊思想が導入されたからだと考えられています(金関1986)。つまり、祭祀や信仰観に変化が生じたと理

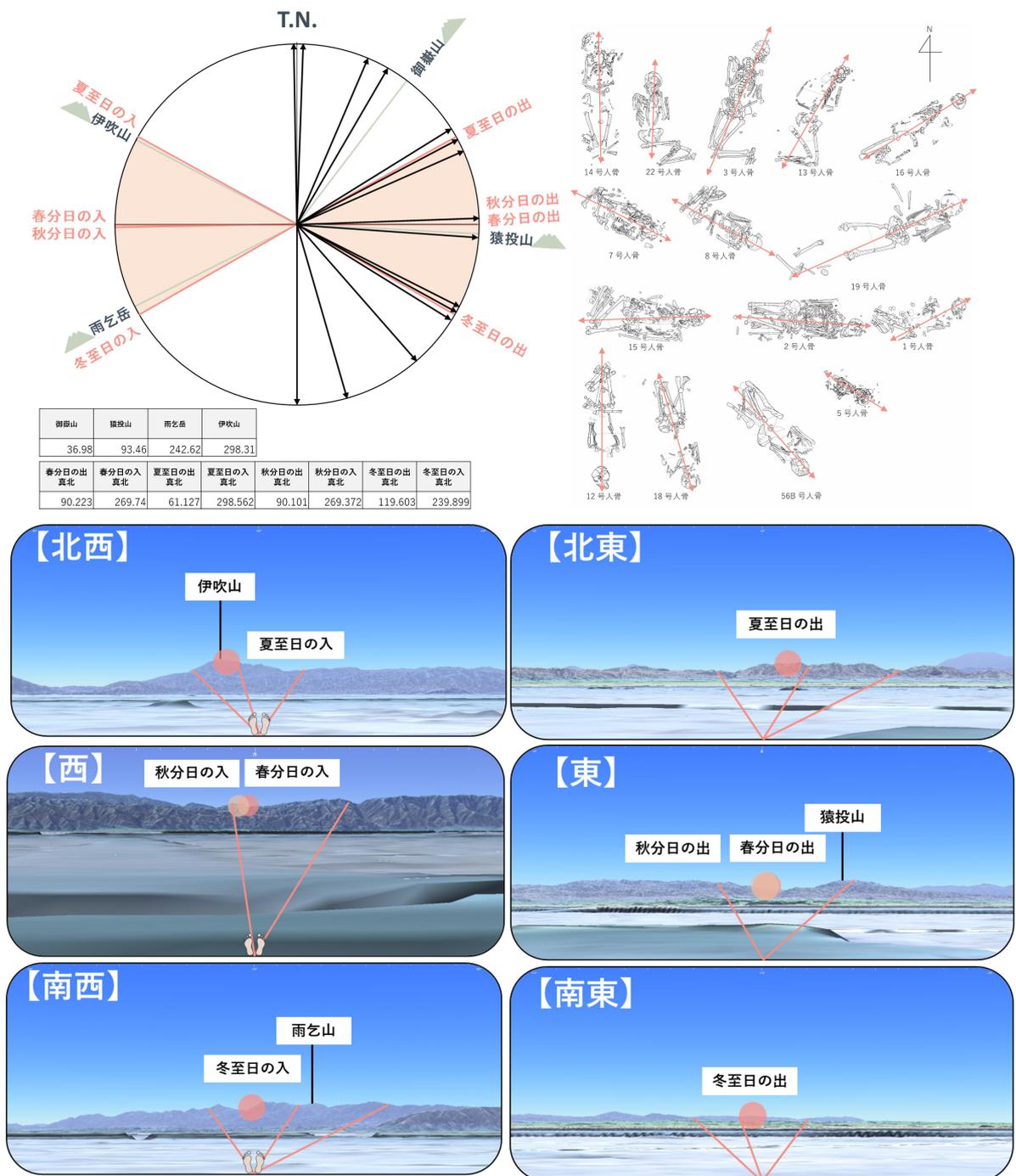


図6 朝日遺跡の埋葬頭位 (B.C.50)

解できるのです。こうした事実を踏まえれば、埋葬頭位の多様化は、新相の文化や信仰観を導入しながらも、古相の文化を併存させた結果だと解釈できます。

⑤ 弥生後期前葉

多様な文化要素が入り乱れた中期後葉を経て、朝日遺跡は大規模な水害に見舞われることとなります。この災害から復興した時期が、弥生時代後期前葉です。中期後葉に廃止された環濠が規模を縮小する形で再度掘削され、二つの区画を有する古来の集落景観が復活しました。

ここで注目したいのが、北区画の環濠内に突如出現した方形周溝墓SZ132の存在です。朝日遺跡の方形周溝墓は、共伴する遺物が少ないことで知られていますが、この墓からは山中式土器の標式遺跡に指定されるほど、大量の土器が見つっています。また朝日遺跡では、合計560基以上の方形周溝墓が確認されておりますが、環濠内に造られたものは、方形周溝墓SZ132以外にはありません。その軸線を点検してみると、夏至の太陽が昇り、冬至の太陽が沈む方向に向けられていることがわかりました(図7)。環濠内に唯一作られた特殊な遺構が、太陽の軸線という古い伝統を採用した事実は、決して無視できるものではありません。また、周囲からは太陽をシンボライズしたかのような、特殊なデザインのパレス・スタイル土器が出土しています。赤と黒の円を交互に描いたデザインは他に出土例がありません。ですから、この方形周溝墓が夏至の日の出・冬至の日の入りを向くことは、極めて重要だと考えます。

それでは、なぜ朝日遺跡の人々は、中期中葉以前の集落構造を復活させ、特殊な方形周溝墓に太陽の軸線を採用したのでしょうか。私は中期後葉に生じた洪水が関係したと考えています。洪水が発生する前の時期、朝日遺跡の人々は今までの墓地を改築する行為を行い、新たな葬送儀礼を導入しました。しかし洪水が発生した結果、入植して以来、安定していた朝日遺跡での生活に危機が訪れます。そうした事実関係をふまえれば、洪水を祖霊の怒りと捉えた人々が、古相の文化を見直し復活させた、との仮説が立てられます。

比較のために一度、尾張地域に存在する別の遺跡に目を向けてみたいと思います。朝日遺跡から東に9kmの場所にある勝川遺跡では、弥生時代後期から古墳時代後期に至る300～400年もの間、先祖が眠る中心部を改築することなく墓が作られました(財団法人愛知県埋蔵文化財センター1988)。また、猫島遺跡の西方に位置する山中遺跡でも、弥生時代後期～古墳時代初頭の間、前時代の方形周溝墓を意識した造墓が行われていたようです(財団法人愛知県埋蔵文化財センター

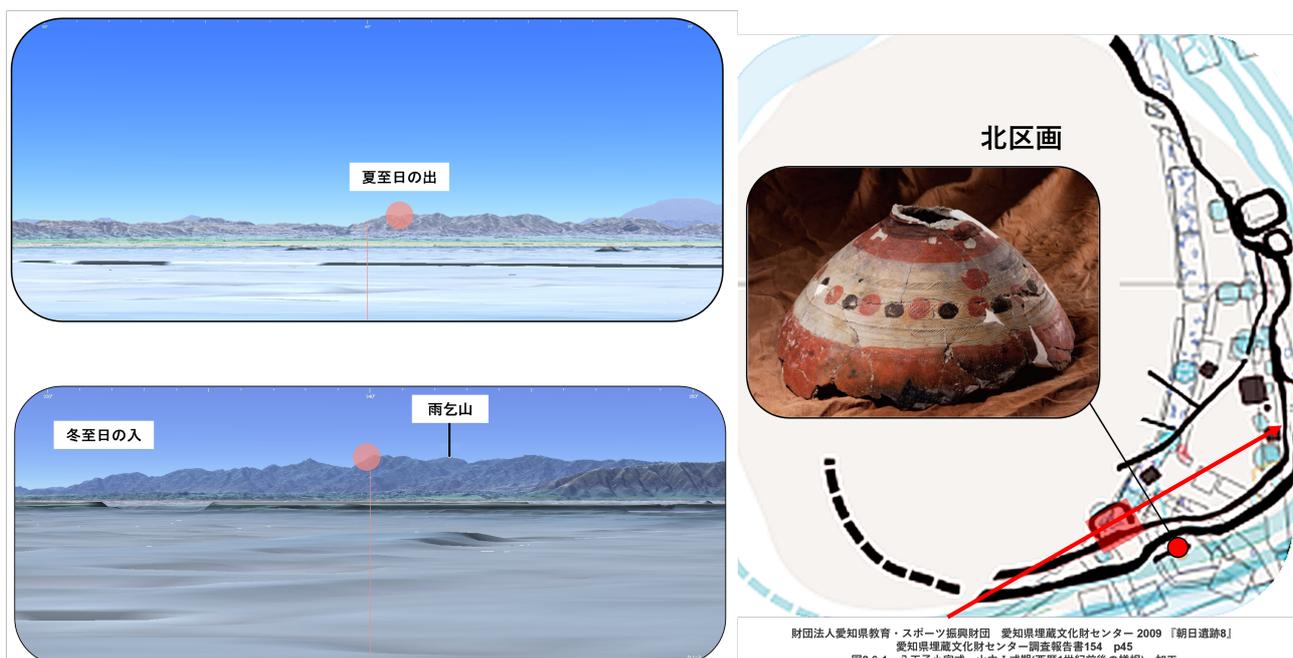


図7 朝日遺跡方形周溝墓SZ132 (A.D.100)

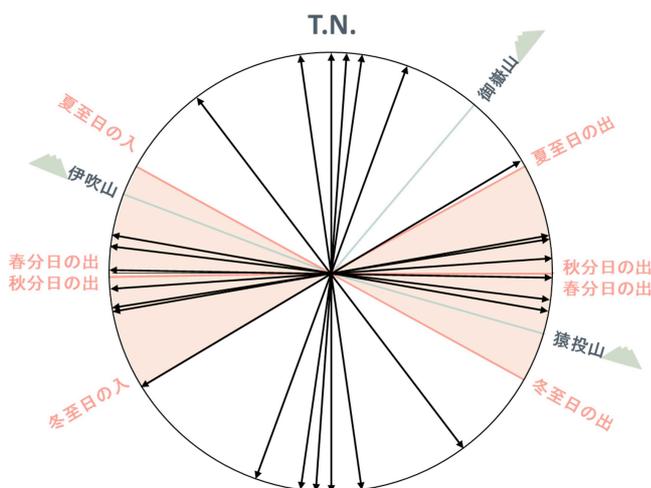
1992)。つまり、弥生時代後期以降、尾張地域では先祖の墓を壊すべきではないという意識が復活するようです(宮腰2002)。事実、朝日遺跡においても、洪水以降、墓を攪乱することは無くなりました。

さて、こうした特殊な方形周溝墓SZ132では、どのような祭祀が行われていたのでしょうか。この問題を紐解くカギが、弥生後期に北区画から集中して出土する鳥形土器と、鶏の骨にあると私は考えています。

古来より鳥は死者の霊や祭祀者と関係が深いことが指摘されてきました。たとえば、奈良県坪井遺跡や長野県長野遺跡群東町遺跡からは、鳥装のシャーマンを描いた弥生時代中期の絵画土器が出土しています。また、記紀神話では、天の岩戸の前で暁を告げる長鳴き鳥として登場し、病に倒れたヤマトタケルの魂が、白鳥となって天に飛び立つ様子も描かれています。

アルタイ系諸民族の民俗事例から、鳥の信仰や儀礼を論じた坂本和俊氏によれば、鳥が霊となり飛来する思想は弥生時代に存在しており、シャーマンは霊と交歓するために鳥葬をまとったそうです(坂本1999)。民俗学者の谷川健一氏は、鶏が「死者の魂をはこび、死体の置かれる場所を選定し、人間の罪やけがれを背負い贖罪の鳥として他界に追放されるという『死の鳥』と、太陽の再生並びに死者の魂の復活を告知する『生の鳥』の二つを備えた鳥」(谷川1988、112頁)だと言います。このような鳥と人々の関係を考えると、祭祀施設として機能した北区画では、鳥形土器や鶏を用いた霊との交信が執り行われた可能性が高いと思われるのです。では以上の理解をふまえ、ここで古代人の認知領域に踏み込んでみます。すると次のような推測ができます。

中期後葉、朝日遺跡を営んだ人々は、新相の文化や信仰観を導入する過程で、祖先の墓を攪乱してしまいます。ただしそれは祖先への冒瀆だとも受け止められかねない行為でした。そのタイミングで洪水が発生したため、この惨禍を祖先からの戒めだと受け止めた人々は、祖霊の怒りを鎮めるべく、中期中葉以前の集落景観を復活させた、という経緯が復元できます。この過程で誕生した方形周溝墓SZ132を取り巻く空間こそ、現世の人々が他界に住まう祖霊と交信する場であり、死者の魂を移動する儀式が執り行われた場所でした。この場所で人々は祖霊の魂を鳥型土器に込め、安寧の他界に導いたと言えるのではないのでしょうか。つまり、方形周溝墓SZ132に太陽の軸線が採用されたのは、祖霊と語り合う場に相応しい、古相の空間設計が再興された結果だと私は考えます。



御嶽山	猿投山	雨乞岳 (視認不可)	伊吹山
43.48	104.05	229.87	293.81

春分日の出 真北	春分日の入 真北	夏至日の出 真北	夏至日の入 真北	秋分日の出 真北	秋分日の出 真北	冬至日の出 真北	冬至日の入 真北
90.323	268.796	60.985	298.536	89.895	268.776	119.424	239.432

遺跡名	地点名	土壙墓	時期1	墓番号	TN墓壙軸線 (時計回り)	
山中遺跡		SZ10	弥生後期後葉	SK40	86	266
山中遺跡		SZ10	弥生後期後葉	SK41	172	352
山中遺跡		SZ10	弥生後期後葉	SK42	4	184
山中遺跡		SZ10	弥生後期後葉	SK43	59	239
山中遺跡		SZ10	弥生後期後葉	SK44	8	188
山中遺跡		SZ10	弥生後期後葉	SK45	80	260
山中遺跡		SZ10	弥生後期後葉	SK46	100	280
山中遺跡		SZ11	弥生後期後葉	SK51	97	274
山中遺跡		SZ11	弥生後期後葉	SK52	20	200
山中遺跡		SZ13	弥生後期後葉	SK53	81	261
山中遺跡		SZ13	弥生後期後葉	SK54	91	271
山中遺跡		SZ13	弥生後期後葉	SK55	0	180
山中遺跡		SZ13	弥生後期後葉	SK56	143	323
山中遺跡		SZ13	弥生後期後葉	SK57	136	316

図8 山中遺跡の土壙墓方位 (A.D.200)

実際、勝川遺跡や山中遺跡では、鳥形土器は出土していません。また、この時期、東西墓域からは方形の建物跡が検出されており、墓域の各所で祖霊祭祀が執り行われていた可能性が、報告書でも指摘されています(愛知県埋蔵文化財センター2009)。つまり、方形周溝墓SZ132に古相の方位観念である太陽の軸線が用いられたのは、祖霊の魂を鎮めるための営為であり、偶然ではなかったと私は言いたいのです。

3.脈々と続く太陽への指向性

① 弥生後期後葉

さて、後期前葉を境に、朝日遺跡の規模は縮小し、そこで生活を営んでいた人々も各地へ旅立つこととなります。しかし、先祖代々続く太陽への志向性は、各地で継承されていきました。それが顕著に現れるのが、後期後葉に営まれた山中遺跡の様相です。検出された墓墳の方位を点検してみると、南北方向と東西方向に二分されることがわかります(図8)。

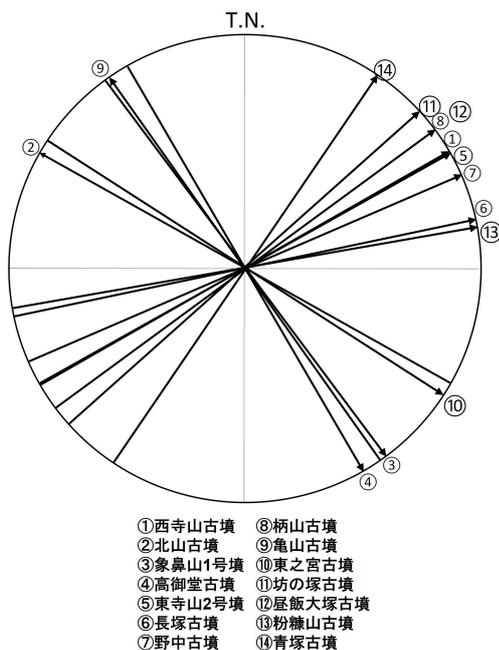
後期後葉には、中国から日本に坐北朝南という新相の方位観念が伝わったとされています。これは、天の北極を中心に据えた北辰信仰に由来する思想です。山中遺跡の様相は、そうした中国側の方位観念と、脈々と受け継がれてきた方位観念が併存した状態だと捉えられます。

② 古墳前期

こうした南北を重視する方位観念は、近畿地方や関東地方の大型前方後円墳で積極的に採用されていきます。しかし、尾張地域では南北軸線に収斂することなく、東西軸線すなわち古相の方位観念が採用されました(図9)。なかでも墳丘軸線と埋葬施設を平行させた事例として注目されるのが、冬至の日の出・夏至の日の入ラインを志向した、北山古墳と東之宮古墳です。

北山古墳は岐阜県に所在する前方後方墳です。自由にその方位を選択可能な、平地上に築造されました。発掘調査は行われておらず、内部構造や副葬品は不明ですが、明治期には舶載の内行花文鏡が発見されました。太陽がモチーフの内行花文鏡が副葬され、平坦部に築造されたことを踏まえると、冬至の日の出・夏至日の入りラインを採用したのは、意図的だと考えられます。

また、東之宮古墳は白山平の頂上に築造された前方後方墳です。チャートの岩盤で形成された白山平の山頂部分を一度平らに削平し、その上に古墳を築いたことが分かっています。墳丘は自



県	墳形	古墳名	集成時期	前方部	後方部	春分日の出	春分日の入	夏至日の出	夏至日の入	秋分日の出	秋分日の入	冬至日の出	冬至日の入
岐阜	前方後円	東寺山2号墳	3	240.5	60.5	91.324	269.726	62.477	299.339	91.087	269.464	121.116	240.358
岐阜	前方後円	長塚古墳	3	258	78	91.326	269.332	62.027	299.34	91.114	268.933	120.778	240.325
岐阜	前方後円	野中古墳	3	246.5	66.5	91.328	269.202	62.038	299.329	91.113	268.932	121.123	240.324
岐阜	前方後円	西寺山古墳	2	240	60	91.181	269.331	62.352	299.361	91.114	268.909	121.272	240.325
岐阜	前方後円	坊の塚古墳	4	228	48	92.095	269.888	61.91	298.696	91.973	269.532	120.435	239.884
岐阜	前方後円	柄山古墳	3	233.5	53.5	94.577	268.918	70.672	297.099	94.239	268.922	121.405	239.55
岐阜	前方後円	北山古墳	2	118.5	298.5	90.492	266.414	61.261	296.676	90.389	266.29	119.316	239.544
岐阜	前方後円	亀山古墳	3	145	325	90.747	266.286	61.268	296.675	90.271	266.301	119.454	239.205
岐阜	前方後円	屋敷大塚古墳	4	233.5	53.5	90.186	268.273	60.827	296.374	90.079	267.935	119.285	238.147
岐阜	前方後円	粉糠山古墳	4	260	80	90.182	268.145	62.649	296.384	90.07	267.796	119.284	237.975
岐阜	前方後円	象鼻山1号墳	2	323.5	143.5	90.226	268.257	60.702	297.931	90.012	267.861	119.146	232.978
愛知	前方後円	高御堂古墳	2	330	150	271528	269.616	61.803	298.971	91.507	269.35	120.214	240.441
愛知	前方後円	東之宮古墳	3	303	123	91.042	269.742	62.215	298.837	90.688	269.754	119.978	240.047
愛知	前方後円	青塚古墳	4	214	34	91.155	270.173	61.784	298.83	91.043	269.816	119.92	240.062

図9 前期前方後円(方)墳の墳丘軸線(A.D.250~400)

然地形を一切利用することなく、麓から運び上げた土で構築されたことから、北山古墳と同様、自由に墳丘軸線を設定できたと考えられています。後方部の竪穴式石槨からは、11面の鏡が検出されており、内行花文鏡の文様を散りばめた倭製の方格規矩鏡が発見されています。東之宮古墳では、類例のない人物禽獣文鏡という倭鏡が4面出土しており、鏡への強い憧憬があったと考えられます。そのため、立地・築造方法・副葬品に強いこだわりを有する東之宮古墳の軸線が、冬至の日の出・夏至日の入りラインを採用したのは、意図的な営為だと捉えられるのです。

⑨ 太陽と人々の営みを追って

以上、太陽と人々の関わりを通時的に考えてきました。その結果として、朝日遺跡・猫島遺跡・山中遺跡・東之宮古墳・北山古墳では、東西軸を重視したことがわかりました。つまり、尾張地域の人々が太陽の運行に特別な意味を与えたと考える赤塚次郎さんの説は、埋葬施設に反映された方位観念からも追認できるのです。

こうした太陽への指向性は、現代においても継承されています。尾張地域の北西部に位置する朝鳥明神では冬至の祭りが行われています(清水1998)。この神社は、『美濃国神名帳』(938～961年)に天照大御神を祭る神社として記載された古社であり、平安時代から現代まで太陽への志向性が継承された可能性を示唆する貴重な事例です。つまり尾張地域の人々は、長期間継続的に太陽への信仰心を持ち続けていたのです。

【参考文献】

- 赤塚次郎2001「墳丘墓と槽形木棺墓について」『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書91
 赤塚次郎2003「猫島遺跡の墳墓と木棺墓」『猫島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書107
 赤塚次郎2018『邪馬台国時代の東海の王 東之宮古墳』シリーズ「歴史を学ぶ」130新泉社
 赤塚次郎2022「史跡東之宮古墳整備完了1周年記念シンポジウム」
<https://www.youtube.com/watch?v=IBsc3Hdcbsw> 2022年6月7日閲覧
 池田次郎1992「方形周溝墓出土の弥生時代人骨について—1985年発掘朝日遺跡SZ111号墓3号人骨—」財団法人愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡2(自然科学編)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書31
 江田真毅・井上貴大2011「非計測形質によるキジ科遺存体の同定基準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」『動物考古学』第28号動物考古学研究会
 江田真毅2016「家畜に伴う骨形態の小進化と弥生時代のニワトリ」『動物考古学』第33号動物考古学研究会
 江田真毅2018「弥生時代のニワトリ、再考」『季刊考古学』第144号吉川弘文館
 金関恕1986「呪術と祭り」『岩波講座 日本考古学』第4巻岩波書店
 後藤守一1931「埴輪の意義」『考古学雑誌』21巻1号日本考古学会
 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2009『朝日遺跡8』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書154
 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1988『勝川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書3
 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書40
 坂本和俊1999「鳥に託された古代人の心—民族・民俗・文献・考古資料から—」『鳥の考古学』第5回特別展 かみつけの里博物館
 澤田文夫2000「古墳上の鶏形埴輪の方位について—古代に鶏は朝告鳥であったか?—」『動物考古学』第15号動物考古学研究会
 篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登2021「愛知県清須市朝日遺跡出土人骨弥生人骨のミトコンドリアDNA分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集
 清水昭男1998「揖斐川町朝鳥明神社の冬至祭—太陽を拝する磐境・墳墓祭祀—」『岐阜県の祭りからII』一つ葉文庫
 白川美冬2022「景観史的観点からみた前方後方墳—発祥地と波及先を対象に—」『東海史学』第56号東海大学史学会
 谷川健一1998「鶏型土器について」『東アジアの古代文化』54号大和書房
 新美倫子2008「鳥と日本人」西本豊弘編『人と動物の日本史』1吉川弘文館
 西田親史1999「関東地方における鶏形埴輪の諸問題」『動物考古学』第12号動物考古学研究会
 西田親史2000「続・鶏形埴輪の諸問題—中部・東北地方の出土事例を中心に—」『動物考古学』第15号動物考古学研究会
 西本豊弘1993「弥生時代のニワトリ」『動物考古学』第1号 動物考古学研究会
 西本豊弘1994「朝日遺跡出土のイヌと動物遺体のまとめ」『朝日遺跡5(土器編 総論編)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書34
 原田大六1966『実在した神話—発掘された平原弥生古墳—』学生社
 原田幹2013『東西弥生文化の結節点』シリーズ「遺跡を学ぶ」88新泉社
 北條芳隆2017『古墳の方位と太陽』ものが語る歴史36同成社
 宮腰健司2002「尾張低地部における小規模古墳の様相」『研究紀要3』愛知県教育サービスセンター他
 *報告書掲載図面の出典は割愛しました。